The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	短期交換留学プログラムにおける産学民連携型セミナー開催の意義と課題
Author(s)	岩井, 茂樹; 小森, 万里; 立川, 真紀絵 他
Citation	大阪大学日本語日本文化教育センター授業研究. 2023, 21, p. 1-14
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/91277
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

短期交換留学プログラムにおける産学民連携型セミナー開催の意義と課題

Significance and Issues of Holding a Regional Collaboration Type Seminar during a Short-term Exchange Program

岩井 茂樹・小森 万里・立川 真紀絵・松浦 幸祐

【要旨】

大阪大学短期交換留学プログラムの一つであるメイプル・プログラムでは、コロナ禍で渡日できていない留学生が地域住民から地域に密着した情報を得ることにより、留学先である箕面市についてのイメージを喚起することを目的として、産学民連携型のセミナー「Let me know! Minoh! セミナー」を開催した。このセミナーは、のちのPBL（Project-based Learning）活動へとつなげるものである。本セミナーは「主体」「場」「方法」という３つの新しさを兼備したものであった。セミナー開催後に参加学生を対象に行ったアンケートの結果、箕面市の情報の獲得、箕面市への興味の高まりおよびイメージ喚起、箕面市民との関係性構築への期待の高まりなどの成果が顕著であった。また実際に、後日行ったPBL発表会における発表タイトルでは、箕面市に関する幅広いテーマに取り組んでいるグループが複数見られた。以上のようなことから、本セミナーを行ったことにより、学生に箕面市の一員であるという自覚が芽生え、PBL発表会に取り組めたことが明らかになった。

序論

アクティブ・ラーニングを教育に取り入れ、実践を通じて学生に学びの場を与えようという取り組みが、小学校から大学、さらには一般企業の中にも取り入れられつつある。

アクティブ・ラーニングが教育現場に取り入れられた経緯と内実、その問題点等については、小針（2018）や渡部（2020）に詳しい。ただ一言で簡潔にまとめるなら、こうした流れは従来の学習があまりにも受け身であったことへの反省に基づいて行われ始めたものである。学生たちはせっかく学校で習得した知識を、実際に試したり、成功または失敗したりする経験を全くしないままに、社会に出ることになる。つまり、教育現場で学んできた知識を活かす場が、教育現場にはないという大きな問題があった。

また従来の教育があまりにも個人単位での勉学に偏重していたことへの反省もあろう。個人単位で学ぶことのメリットもあろうが、社会性や協調性の養成、多様性への理解を育むことはそう簡単なことではない。

こうした理由でアクティブ・ラーニングが教育の現場に取り入れられてきたという経緯がある。

その中でも特に注目されている方法の一つにProject-based Learning（以下、PBLとする）がある。例えば、小学校ではIoT教材を利用した小俣・今井（2021）、中学校では英語科目に中村（2022）などの取り組みが行われているが、その多くが、学生たちを数名のグループに分け、彼らに何らかのプロジェクトテーマを与えたり、自分たちで考えさせたりし、実践する中で知識や技能を、自らの経験を通して学んでもらうという形を取り、その実践報告も数多くなされている。

我々が発表した立川・小森・岩井（2022）もその一つである。詳しくは前稿をご覧いただきたいが、この論考が他と異なる点は大きく三点ある。一点目は、対象が留学生であること。つ

まり、多様な文化圏から留学してくる学生に対し、PBL活動を通じて、我々のプログラム（以下、メイプル・プログラム）で最も重視している「知る」「伝える」「話し合う」という三つのコミュニケーションスキルを習得、さらには練磨してもらうために実践している点である。ちなみに、メイプル・プログラムは大阪大学日本語日本文化教育センターがデザインする短期留学プログラムのことである。このプログラムは10月に始まり、次年度の８月に終わる約１年間の協定校からの交換留学プログラムであり、そこには毎年80名程度の学生が20数ヶ国から参加するものである。前述した「知る」「伝える」「話し合う」というスキルの向上を図り、「他の文化の人たちや社会とつながることができる人になる」ように、教育を行っている。二点目は、一年の活動であること。PBLの多くは、短期で行われる傾向にある。例えば、一週間や二週間単位で、何か一つのプログラムを実践するという形を取ることが多い。古田・原田（2022）などは、一日で終了するイベントを複数分析対象にして、そこにおける学生の学びを分析したものである。だが、メイプル・プログラムでは一年間をかけてPBLを行い、最後に成果発表と成果提出を求めている。そして最後の三点目は、地域との連携である。学内だけではなく、学生たちが実際に住んでいる箕面市の住民たちと交流することによって、よりお互いを理解し合ったり、箕面市という土地を知ったりすることができると考えたからである。ちなみに、前稿では、我々のキャンパスのある箕面市をより深く理解させるために、「箕面らしさの探究」というプロジェクトを実施した。

こうした取り組みによって、メイプル・プログラムが目標にしている「知る」「伝える」「話し合う」というコミュニケーションスキルが養成されただけではなく、地域との連携や関係強化もできた。

ただ、反省点もあった。一番大きな反省点は、学生が箕面市を自分の町として捉えきれていないというものであった。どうしても自分事ではなく、他人事であり、箕面市を本気で捉えようとしていない様子が窺われた。したがって、もっと学生が自分事として捉えられるセミナーの実施や環境作りをしなければならない。もう一つの反省点は、学生や大学関係者と地域住民との間の協力関係や連携がまだ十分に構築されていないという点であった。より多彩な市民や団体と、より密な協力関係と、より深い連携をしていかないといけないという事である。

以上の反省点について可能な限り解決を試み、実践に移したのが本稿で取り上げるPBLに向けたセミナーである。

第一章：産学民連携型セミナーの実施とその概要

本稿は、産学民連携型イベントの実施報告と、実施後のアンケート調査に基づいた成果と課題を報告するものである。具体的には、前述のような反省点を解決すべく、2021年10月に2021年度のメイプル・プログラムを開始した。だが、新型コロナウィルス感染症の蔓延や国の方針などによって、プログラム応募者ほぼ全員（実際にはエジプトからの学生２名のみ11月に渡日できた）が渡日できないという事態が発生した。これは一年間かけてPBLを実施しようとするメイプル・プログラムにとっては非常に困った事態であった。なぜなら、学生がプロジェクトで取り組む箕面市という土地を訪れたこともなければ、渡日さえできていないため、箕面市についてのイメージなどできないという問題が発生したからである。

もちろんインターネットでの検索などによって、箕面市のことを知ることはできる。ただ、

それにも限界がある。箕面市の場合は、滝や寺など自然や歴史に関する情報は入手できたとしても、実際の生活や人々の活動についての情報までは知り得ない。これでは、自分たちが暮らす箕面市を自分事として考え、プロジェクトを行うことなど、ほぼ不可能であり、大きな意義も見出せないことは明らかであった。さらには、新キャンパス開設や新駅設置等により、今後の人口増加と発展が見込まれる地域であるが、この時点ではインターネットで調べることが困難な状態であった。

それに加え、メイプル・プログラムとしても、2020年度～ 2021年度の「箕面らしさの探究」という「探究型PBL」から、2022年度は「箕面市の課題解決の発見と提案」という「課題解決と提案型PBL」にPBLの形態自体を移行させようと考えていたところであった。

ところが、新型コロナウィルス感染症拡大の長期化により、秋～冬学期（2021年10月～ 2022年 3 月）まで、ほとんどの学生が渡日不可能であることも次第にわかってきた。

そこで、たとえオンラインであっても箕面市のことを渡日前にイメージさせることを目的として、オンライン開催でもできるようなイベントとして「Let me know! Minoh! セミナー」（以下、本セミナーとする）を企画した。本セミナーは2021年度秋～冬学期に開催し、2022年度春～夏学期のPBLにつなげたものである[1)]。

今回は、NHK大阪拠点放送局（現在はNHK大阪放送局：以下、NHKとする）が、「えぇトコ」という番組で箕面市を取り上げていたため、これを活用することをまず考えた。番組の内容は、滝などの名所の紹介だけではなく、箕面市に暮らす人々、とりわけ珍しい野菜を作っている農家を数軒取り上げ、試食してみる、というものであった。こうした内容を制作し、わかりやすく編集できるのは、放送局だから実現できたことであって、少なくとも我々教員や学生だけでは作成不可能な内容であった。またそれは箕面市をイメージしやすいような映像と内容だったため、海外の学生がオンラインで視聴しても、全てではないにしろ、箕面市がどのようなところか、理解できるようなものになっていた。

そこでNHKにこの番組を視聴することを軸にセミナーを共同開催できないかと打診した結果、快諾を得、2022年 1 月に実施できることになった。

公式・非公式合わせると、10回を超える打ち合わせを行ったが、その結果、箕面市についてのイメージを喚起するということを目的に、以下のような三部構成でセミナーを開催することに決定した。なお、このセミナーは、留学生たちの興味をできるだけ喚起することと、開催側も親しみを持って呼べるように、その呼称を「Let me know! Minoh! セミナー」として開催した。

第一部：NHK「えぇトコ未来の風吹く！山里タウン～大阪 箕面市～」視聴
第二部：箕面市の野菜の試食擬似体験
第三部：箕面市の人たちとのディスカッション

第一部は、まず箕面市がどのような町なのか、どのような特徴があるのかを学生たちに大まかにイメージしてもらうために、NHKにより制作された番組「えぇトコ未来の風吹く！山里タウン～大阪 箕面市～」の視聴を行ったものである。

第二部は、番組内で紹介されていた箕面市で作られている特別な野菜を、教員が実際に試食

してみるというものである。当然、学生はオンライン上で試食できないのだが、教員のコメントや表情などによって、ある程度は野菜の味や食感といった特徴がイメージできると考えたからである。また箕面市に実際に早く行ってみたいという気持ちを喚起できるかもしれないと考え、取り組んだ企画でもあった。

第三部は、主に箕面船場まちづくり協議会の理事２名に会場にお越しいただき、箕面市の魅力を生活者の視点から語っていただくことで、より箕面市での生活をイメージしてもらおうという目的で行ったものである。また最後に質疑応答などをして、学生ともディスカッションをしてもらうことで、箕面市の人の人柄や、箕面市の方々が行っているイベントの紹介、それに市民が留学生の来日を強く待ち望んでいる気持ちなどを伝える意図を含めて行った企画であった。

つまり、このセミナーの新規性は、以下の３点にまとめることができる。

１）留学生が留学先である箕面市を自分の町として認識し地域連携を深めていくという「主体の新しさ」
２）新キャンパス開設、新駅設置による人口増加と発展が見込まれる地域の町づくりに関わるという「場の新しさ」
３）未渡日の学生が世界の各地から箕面市のローカルな情報にアクセスできるように、地域と在外留学生を繋ぐという「方法の新しさ」

次章では、本セミナー開催前の問題点と、開催当日の問題点について説明する。

第二章：産学民連携セミナーの実施の問題点

本セミナーを開催するにあたっては、当然ながらいくつかの問題点を解決しながら、進めていく必要があった。大別すると、開催前における問題点と、開催当日における問題点があるので、それを以下に分けて述べようと思う。

第一節：セミナー開催前の問題点

セミナー開催前に最も問題となり、また実際に苦労した点として挙げないといけないのは、まず人間関係の構築であった。

第一章で述べたように、本セミナーにはNHK、箕面船場まちづくり協議会、箕面市で農家を営んでおられる方の協力など複数の関係者間での協力が必要であった。明確には示せないが、直接相談などの会議を行った人だけでも10名を超える人との連携が必要であった。まずその人たちとの日程調整、意義やコンセプトの共有など、相互理解をしなければいけない。これには先述したように、10回を超えるオンライン、対面での会議を約２ヶ月間で行った。

ここで注意しておきたいのは、相互理解だけでは十分ではないということである。お互いに理解した上で、人間間の信頼も構築していかなければ、物事が円滑に進まないということである。

またこれは相互理解の中に入るものであるが、お互いの利害関係の調整も難しい点である。より具体的に説明しよう。たとえば、NHKの場合、主として受信料を支払っている日本人向け

に放送している公共放送である。本来ならば、日本人のためになるような内容の番組を、日本人に向けて放送することにより、NHKの視聴者を増やしたり、受信料の徴収を円滑にしたりしたい、というのが本来の業務目的である。だが、今回我々が対象としているのは、海外にいる学生である。そうした学生たちは、日本語を勉強していることもあり、NHKワールドJAPANなどの放送を視聴したことのある者も中にはいるが、まったく知らない人もいるだろう。そうした中で、NHKが本セミナーに協力するメリットは何か。これが問題になった。幸いにも日本に興味を持ってもらうことも日本の公共放送の役割の一つであり、また地方にも強い関心を持ってもらえるかもしれないというメリットも感じてもらえたため、この問題を解決することができた。他方、我々のプログラムとしては、ともかく学生の教育に資するようなものを提供してもらうことが必須であった。これは今回軸となるNHKの「えぇトコ」が、普段見られない高画質な映像を提供していること、テレビ局しか取材できない場所をいくつも取り上げて紹介していること、それに歩いているような角度でのカメラワークで番組が作られていること、というメリットがあるために、相互の利害が一致した。

箕面船場まちづくり協議会との利害関係では、以下のような問題があった。先方としては、できるだけ箕面市のまちづくり、つまり住人や町、そしてそこで行っているイベントに関心を持ってもらいたいという意思が強かったが、我々のプログラムとしては、学生たちに自分の町として地域の人たちとの交流を図っていってほしかった。そのため、第三部のセクションを設けることで利害が一致し、解決に至った。

農家の方には、趣旨を理解していただいた上で参加していただくことになった。直接的には利益は発生しないが、間接的にでも箕面市の野菜や農業に関心を持ってもらえれば、ということでご理解いただき、ご協力いただいた。

こうして協力してもらう組織や団体や個人が増えれば増えるほど、一般的には大きく多彩なイベントができる可能性はあるが、その反面、ここに示したような様々なところとの調整が難しくなり、また時間もかかるのである。

ただし、逆に言えば、この組織間、人間間の連携が固くなり、信頼が生じさえすれば、イベントはほぼ成功すると言っていいだろう。本セミナーなどのイベント開催前には、この連携と信頼をどのように作るかが、最大のポイントである。

第二節：セミナー当日の問題点

セミナー当日は、大きく３つの問題点があった。

１つ目は、オンライン、かつ渡日前の学生にどのくらい情報が伝わるか、という問題である。換言すると情報の量と質の確保の問題である。当日は、渡日できた学生２名とは別に、メイプル・プログラム以外で渡日できた他のプログラムの学生が十数名、対面会場でセミナーに参加した。こうした対面参加者の学生もいたが、本セミナーの主役はあくまでもオンライン学生であり、オンラインの学生のイメージ喚起を目的としたものである。したがって、そのことをNHK、箕面船場まちづくり協議会、農家の方や、オンライン配信担当業者などの各担当者に、繰り返し伝え、強調してセミナーを行った。現実問題として、渡日前の学生は、まだ日本語母語話者が話す日本語に慣れていない。さらには、我々のプログラムには、日本語能力試験のN1相当の学生もいれば、N4相当の学生も在籍している。このような条件の下、どのようにすれば

箕面市をイメージできるような情報を伝えることができるのか、が問題となった。

2つ目は、会場の雰囲気が学生にどのくらい伝わるのかについての問題である。渡日できていない学生にはオンラインで行われる本セミナーの臨場感が伝わりにくいこと、もう一つは、そうしたオンライン参加の学生の状況が対面会場にいる参加者に伝わりにくいため、対面会場の参加者はオンライン参加の学生の様子を十分に把握できないまま話をすることになること、さらに、そのような対面参加者の話し方がオンライン参加の学生に対して一層伝わりにくくなるという悪循環になるのではないかということである。もし臨場感のないままセミナーを行った場合、オンデマンド教材で配信するのと大きく変わらないものになってしまう。つまり、同時刻にオンラインでセミナーを行う意義自体が損なわれかねないという懸念があった。

以上二点の問題点に関する一つの試みとして、庵など（2020）などが提唱する「やさしい日本語」を使用する様に心がけた。ここで言う「やさしい日本語」とは、単に簡単な日本語という意味ではない。それは、たとえば、文の長さを短くしたり、文末表現の言い換えや工夫をしたりするような複合的なものである。今回のセミナーでは、これを多用した。ただし、学生はオンラインでの参加であるため、対面で行えるようなこと全てを行うことはできない。そこで、メイプル・プログラム担当教員が松岡（2022）と同様の方法でチャット機能を使用した「やさしい日本語」への変換サポート作業を並行して行い、できる限り「やさしい日本語」で伝えるように工夫した。

3つ目は、時間に関する問題点である。これは一般的なことであるが、セミナーではそれぞれのパートには前もって制限時間が割り振られている。したがって、その時間内でできるだけ多くの内容を伝えようとするのだが、そこには自ずと限界がある。伝えきれなかったもどかしさがどうしても残る。ただし、この点に関して言えば、闇雲に情報をたくさん伝えればいいかというと、そうとも言い切れないと思う。つまり、情報量ではなく、適確な情報が効率よく伝えられたかどうか、が問題であろう。

こうした問題点を克服しきれたかどうかはわからないが、できるだけの配慮を行ってセミナーを開催した。その効果がどのくらい出たのかを次章以下で検証してみたいと思う。

第三章：産学民連携セミナーの実施の効果

本セミナーに対する学生の評価を収集することによって本セミナーの目的の達成度や学習効果を検証するために、参加した学生に対し、セミナー実施後にアンケート調査を行った。表1はアンケート調査の概要である。上述したようにセミナー参加者は渡日前の学生がほとんどであり、日本と学生の居住国・地域との時差が最大9時間あったため、セミナーはハイフレックス方式（非同期型オンライン、同期型オンライン、対面）で行った。アンケートに回答したのはセミナー当日に同期型オンラインまたは対面で参加した41名（有効回答数40）であった。セミナー当日までに渡日できていたメイプル・プログラムの学生は2名のみで、その他はすべてオンラインでの参加であった。

表１．アンケート調査の概要

調査日	2022年２月15日
対象者	メイプル・プログラムの学生58名中、同期型オンラインまたは対面で参加しアンケートに回答した学生41名（有効回答数40）
方法	大阪大学のLMS（Blackboard）にて実施
目的	セミナーに対する学生の評価の収集
内容	セミナーへの評価、内容の理解度、興味の喚起度、感想
質問数	全８問（選択式６問、記述式２問）

表２に選択式質問に対する肯定的評価（表中の下線部）の割合を示した。ここでは、選択式質問の結果に基づいて分析を行い、記述式質問（以下、自由記述とする）の関連する回答を取り上げながら考察を行う。なお、自由記述のデータは学生の回答の表現をそのまま記載し、日本語の誤りが見られる場合も修正は加えていない。

表２．アンケート調査の質問項目

番号	質問（選択肢）	肯定的評価
1	今回のイベントに参加してどうでしたか。（満足した／まあまあ満足した／少し不満だった／不満だった）	87.5%
2	「えぇトコ」のテレビ番組を見ましたが、箕面のことがわかりましたか。（とてもよくわかった／よくわかった／あまりよくわからなかった／ぜんぜんわからなかった）	92.5%
3	箕面の農家の人に野菜について教えてもらいましたが、お話はわかりましたか。（とてもよくわかった／よくわかった／あまりよくわからなかった／ぜんぜんわからなかった）	87.5%
4	Ａ先生が野菜を食べて感想を言ってくれました。箕面の野菜に対して興味がもてましたか（もっと知りたいと思いましたか）。（とても興味が持てた／興味が持てた／あまり興味が持てなかった／ぜんぜん興味が持てなかった）	80.0%
5	箕面の人たちがどのような考えで、まちをつくっているかがわかりましたか。（とてもよくわかった／よくわかった／あまりよくわからなかった／ぜんぜんわからなかった）	80.0%
6	今回のイベントを家族・友人・知っている人にすすめたいと思いますか。どのくらいすすめたいと思うかを「０．ぜんぜんすすめたくない」～「10．とても強くすすめたい」から選んでください。（７～10を肯定的評価として集計）	70.0%

まず、質問１「今回のイベントに参加してどうでしたか」に対して87.5%が肯定的評価をしており、時差があり渡日の見通しもたっていないという、学生にとって非常にストレスの大きい状況の中での開催であったにもかかわらず、満足度の高いセミナーとなったことがわかった。以下、４つの点からさらに考察していく。なお、学生の自由記述内の下線部は筆者らによるものである。

１点目は、知識の獲得についてである。質問２「『えぇトコ』のテレビ番組を見ましたが、箕面のことがわかりましたか」、質問３「箕面の農家の人に野菜について教えてもらいましたが、

お話はわかりましたか」、質問５「箕面の人たちがどのような考えで、まちをつくっているかがわかりましたか」に対して、それぞれ92.5%、87.5%、80.0%といずれも80%以上の肯定的評価があり、第一部のNHK番組視聴や第三部の箕面市の人たちとのディスカッションを通して箕面市についての知識が得られたと評価している学生が多いことがわかった。

自由記述では、「意外と箕面について色々なことを教えてもらいましたから面白かったです」、「このイベントを参加して、勉強している阪大がある街である箕面についてより深く理解できました」、「現代的な建物に囲まれたオカワカメの農家はなんと百年以上の歴史を持っていることに驚きました」、「イベントを通していろいろな面白いことがわかりました。そして箕面の野菜に一番興味を持つようになりました。一度食べてみたいです」など、学生たちが予想していた以上に箕面市の様々な知識や情報が得られ、留学予定の箕面市という地域についての理解が深まったと捉えられたことがわかる。また、オカワカメ農家の歴史や箕面市の野菜など、インターネットでは得られない、地域の人々からの生の情報が獲得できたと感じていることもわかった。

第二章二節でも述べたように、オンライン参加の学生たちには、対面会場の雰囲気（臨場感）やセミナーで伝えたい情報が量の上でも質の上でも伝わりにくいのではないかという懸念が当初はあったが、本プログラムの教員がチャットを利用して「やさしい日本語」で話の要点や話題になっている物事の背景知識などを伝えたことが学生の理解を助けたものと思われる。また、アンケート質問項目の中では特にNHK番組に対する肯定的評価が高かったが、これは、事前に本科目のTFと教員とで「えぇトコ」を視聴し、歴史的人物、地名、食材名、オノマトペなど留学生にとって難易度が高く背景知識が必要な語彙について語彙リストを作成し、大阪市と箕面市の地理的関係がわかるよう簡略化した地図を添え、事前資料として配布していたために、各自で予め資料を使って予習の時間を設けることができたこともセミナーの内容理解を促した要因の一つではないかと考えられる。

２点目は、興味の高まりについてである。質問４「Ａ先生が野菜を食べて感想を言ってくれました。箕面の野菜に対して興味がもてましたか」に対して80.0%の肯定的評価が得られたが、これはセミナー第二部の箕面市の野菜の試食擬似体験で、教員が実際に野菜を食べて感想を述べながら箕面市の農家の方と野菜について話をする様子を視聴したことにより、学生たちの興味が高まり、もっと知りたいという意欲につながったと考えられる。

自由記述には興味の高まりについて、試食疑似体験以外のセミナーの内容からも多くの記述がなされていた。例えば、「参加してよかったと思います。箕面の面白いところや人たちについてもっと知りたいです」、「箕面に来られない私にとって、イベントの地元の人へのインタビューをよく楽しんだ。私は地元の人と箕面との個人的な関係を分かるようになりたい」、「オンラインで見ても、楽しかったです。特に箕面の野菜を農業してみたいです。実は野菜あまり好きじゃありませんが、箕面の野菜が美味しそうなので、好きになるかもしれません」、「『えぇトコ』を見て、私も箕面の野菜体験やラジオ体操にすごく参加したい、畑と高いビル、両方を直接に見てみたいと思った。今までキャンパスの写真しか見たことがなかったけれども、動画を見て、もう我慢できない、キャンパスにいたいと思ってしまった」など、箕面市の各所、人々、農業、地域での生活などについて「知りたい」「分かるようになりたい」「農業してみたい」「参加したい」「見てみたい」といった興味が高まったことを読み取ることができる。この

ような回答から、第一部の番組、第二部の疑似試食体験、第三部のディスカッションと3段階でのセミナー構成による多様な活動を通して、単に一方向的な情報受信にとどまらず、能動的なセミナーへの参加が促され、学生たちの興味が喚起されたのではないかと考えられる。

3点目は、本セミナーの最大の目的ともいえる箕面市のイメージ喚起についてである。自由記述には、「交通の便利さや自然の豊かさなど、箕面市の住みやすさを感じました」、「動画もA先生の感想もとても面白くて、箕面にある自然と文明の共生をよく感じました。最後まで、このセミナーを笑顔で拝見しました」、「色々な興味深いものに知らせてくれました。特にお寺や大学のキャンパスはそうだと思います。食べ物についての話は実にたくさんだったと思って、お腹が空きました。箕面の景色はきれいで、人々はやさしそうです」など、交通の便利さ、箕面市の住みやすさ、自然と文明の共生など箕面市の特徴への理解や、箕面市に住む人々、箕面市での生活などのイメージ喚起ができたことが読み取れる。このような記述から、第一章で述べた「たとえオンラインであっても箕面市のことを渡日前にイメージさせる」という本セミナーの目的が達成できたことが示唆される。2点目の考察でも述べたように、映像、疑似試食体験、ディスカッションという内容を通して、視覚、聴覚、（疑似）味覚、（疑似）触覚などさまざまな感覚で箕面を体験できるような構成にしたことや、ディスカッションを通した直接的な対話への参加がイメージ喚起を促す要因の一つになったのではないだろうか。

4点目は、箕面市での留学生活への期待についてである。「この素晴らしく建てられている箕面にもうすぐ行きたいです。ラジオ体操や文化交流などに参加したいです。私達はボウルにあるお好み焼きの材料みたいというアナロジーもとても良かったと思います。確かに、箕面という素晴らしいボウルがあっても、私達は混ざらない、つまりいいコミュニケーションしないと意味がないでしょう。この言葉をよく覚えて、箕面にいる時、この機会をよく活かしたいと思います。今もオンラインの機会を無駄にしないようにします」というコメントから、学生の期待を読み取ることができる。お好み焼きのアナロジーとは、第三部のディスカッションの際に箕面船場まちづくり協議会の一人の理事が話してくださったことで、大阪の名物であるお好み焼きは具材がボウルの中でうまく混ざらなければおいしくならないように、箕面市に住む人々もいいコミュニケーションをしなければいい町にならないというものである。本セミナーを通して、学生は箕面市についての知識やイメージを得ただけでなく、学生に向けられた言葉から地域の人々が留学生とコミュニケーションをとり一緒に町をつくっていきたいと考えていることを感じ取ったことがこの記述から読み取れる。ここから、箕面市に住む人々との関係性構築や地域社会参加への期待が高まった学生もいたことが示唆される。

以上のように、本アンケート調査の結果から、（1）地域の人々からの生の情報の獲得、（2）箕面市の各所、人々、農業、地域での生活などへの興味の高まり、（3）箕面市の特徴への理解と箕面市に住む人々や箕面市での生活のイメージ喚起、（4）箕面市に住む人々との関係性構築や地域社会参加への期待など、第一章で述べた所期の目的が達成できたことに加え、お好み焼きの比喩に対する感想にもあるように、箕面市の一員としての自覚や多文化共生への意欲の高まりを示す学生も出てくるなど、想定以上の成果があったことが明らかになった。

第四章：産学民連携型セミナーと渡日後のPBLとのつながり

本セミナーに参加したメイプル・プログラムの学生は、その8割ほどが2022年3月末までに

日本に入国し、４月からは教室での対面授業を受け始めた[2)]。学生は、関心を持つテーマごとに３人から５人のグループを作り、７月12日（火）と19日（火）に設けられた発表会（以下、PBL発表会とする）に向けて、グループごとにPBLを進めた。本章では、このようにして渡日した学生が行ったPBLに見られる本セミナーとのつながりについて考察を行う。具体的には、PBL発表会での各グループの発表タイトルと、PBLを進めるプロセスで見られた地域の方々との関係性構築に着目する。

まず、PBL発表会における学生の発表タイトルから見ていく。PBL発表会では、全15グループが表３のタイトルや内容でそれぞれ発表を行ったが、これらの発表には、本セミナーで得た視点が反映されていると思われるものがいくつか観察される[3)]。

表３．PBL発表会での発表タイトルと主な内容

発表タイトル（発表順による）	主な内容
a．もったいない！捨てる代わりに再生しよう	学生寮のゴミを減らす方法
b．Let me know ～ Minohへようこそ	箕面市の見どころの紹介
c．一緒に地球のために頑張ろう！ ―学食で肉食を減少させるための取り組み―	学食で肉食を減らす方法
d．ゼロから始めるリサイクル生活	箕面市のゴミ問題
e．友達になろうや！ ―阪大でワイワイ交流チャンスを作るためのインタビュー集―	留学生と日本人学生の交流
f．箕面市・高齢者が寂しくない場所！	高齢者の交流機会
g．寮に住んでいる人向けのサバイバルガイド	学生寮周辺の生活情報
h．阪大新箕面・新入生の遊ぶ場所を探そう！	キャンパス周辺の遊び場所紹介
i．箕面の留学生が望む街の人々との交流とは	留学生と日本人市民の交流
j．箕面キャンパスのムスリムは何に悩んでいるのか	ムスリム学生の食問題
k．箕面の小学生を守りたい ―通学路の問題の調査から―	小学生の通学路における交通安全
l．一緒にゲームしませんか？ ―交流イベントプロジェクト―	留学生と日本人学生の交流
m．箕面留学生ガイド	キャンパス周辺の生活情報
n．箕面の外国人の飲食習慣	学内外の外国人の飲食事情
o．不安？悩み？友達作ろう ―日本人との交流書―	留学生と日本人市民／学生の交流

本セミナーと表３の発表タイトルに見られるつながりの１点目は、学生が箕面市自体を関心の対象としている点である。第一章で述べた通り、本セミナーの目的の一つは、渡日前の学生が箕面市に関心を持つよう、イメージを持たせることにあった。この視点が反映されていると考えられる発表テーマとして、箕面市を訪れる観光客に向けた見どころの紹介（表３のｂ）や、将来の留学生のために遊ぶ場所やスーパーマーケットなどの生活情報を紹介するもの（表３のｇ，ｈ，ｍ）がある。前稿である立川・小森・岩井（2022）では、これまでのメイプル・プログラムのPBLにおいて、学生が箕面市に対する興味や関心を持てないでいることを一つの課題として挙げた。そのような背景を考えると、学生が箕面市に対して関心を持ち、さらにそれを他者に伝えたいという動機が持てたことは、本セミナーから得られた重要な成果の一部であると

言えよう。

さらに、表３の発表タイトルからは、学生の視野が自分達の周辺から大学周辺の地域社会へと広がりつつあることも見て取れる。例えば、表３のうち、ａ，ｃ，ｄ，ｊ，ｋ，ｎは、全ての人にとってより生活しやすい環境を提案したり、箕面市で生活する際のアドバイスを紹介したりするものであるが、ａ，ｊ，ｎのように、提案の対象が留学生や外国人を主としたものだけでなく、ｄ，ｋのように、箕面市に住む日本人市民の視点を中心にしたものが現れていることに注目されたい。また、ｅ，ｉ，ｌ，ｏのような、日本人との交流について提案を行うものであっても、ｉ，ｏのように、箕面市民との交流に焦点を当てたものが見られる。言い換えるならば、大学や学生コミュニティといった、自分たちにのみ関わる範囲で生じる問題から視野を広げ、箕面市の一員としての問題意識を持つ学生が見られたということである。学生の視野がこのように広がった背景には、箕面市の問題を自分事として捉えられるようになることを期待して行った本セミナーの影響があると言ってよいのではないだろうか。

次に、本セミナーと渡日後のPBLとのつながりの２点目として、学生やメイプル・プログラムと地域の方々との関係性構築について述べる。まず、学生と地域の方々との関係性としては、学生がPBLを進めるプロセスの中で、箕面市に住む方々の実際の意見を聞きに出かけたり、地域のコミュニティに参加しに行ったりするグループが見られたことが挙げられる。具体的には、表３のｄ，ｋ，ｏの発表をした３グループが、第一章でも挙げた箕面船場まちづくり協議会など、市内を中心に活動するいくつかの市民団体を訪問し、箕面市が抱える問題点について話し合いの場を設けたり、各団体の主催するイベントに実際に参加することで留学生と箕面市民との交流機会を調査したりしている。また、箕面市内の公園やラジオ体操の集会等に出かけ、地域の方々と信頼関係を築いた上で、箕面市に住む高齢者や小学生の保護者を対象にインタビューを行ったグループ（表３のｆ，ｋ）も見られた。

学生がこのような行動を取れるようになるためには、何らかの課題を解決する際に、自分達で考えることに加えて、どのような組織や団体からアドバイスを受ければよいかという背景知識を少なくとも持っていなければならない。また、仮にそのような知識を持っていたとしても、渡日後すぐに学外の団体や市民の方々と交流しに行くことにはなかなか踏み切れないものと予想される（多くの学生が３月末までに渡日し、７月にはPBL発表会を行っていることを想起されたい）。このような点を踏まえると、本セミナーは、まずそのような団体が箕面市に存在していることを学生に知ってもらい、かつ、（オンラインではあるが）直接話す機会を持ってもらうことで、学生が市民の方々と交流することへの心理的なハードルを下げる機会として働いたと思われる。つまり、本セミナーは、学生が学外の方々と交流し関係性を築くきっかけの一つであったとも捉えられるわけである。

さらに、個別の学生グループと地域の方々の間で関係性が構築できただけでなく、PBLの取り組み全体としても、企業や地域の方々から継続して協力や関心を持ち続けていただいていることも、本セミナーと渡日後のPBLとのつながりであると言える。例えば、メイプル・プログラムでは、渡日後のPBLを始めるにあたり、４月19日（火）に「PBL事前講義」と題したオンラインイベントを行い、学生が箕面市の持つ歴史・自然・社会・文化・生活について話を聞く機会を設けた。その際には、本セミナーに参加いただいた箕面船場まちづくり協議会をはじめ、箕面市に活動拠点を持つ市民団体の方々や、大阪大学外国語学部の日本人学生に講師を務めて

いただいた。また、PBL事前講義に参加いただいた方々には、本章で述べた７月のPBL発表会においても、学生の発表に対して質問や講評をいただくことができた。さらに、NHKの方々には、PBL事前講義やPBL発表会に見学ゲストとして参加いただくなど、学生の学習の様子に継続して関心を持っていただくことができている。本セミナーは、そのような産学民連携が徐々に拡大していくための端緒としての役割を果たしたと考えられる。

以上で述べたように、本セミナーは、渡日後のPBL実施に対して、以下のつながりが見られた。すなわち、箕面市に対して学生の関心を向けさせることができた点、学内だけでなく、自分たちを取り巻く地域社会へと視野を広げるきっかけになった点、学生が地域の方々と関係性を構築する第一歩のサポートとなった点、PBLの取り組み全体として、企業や地域の方々に関心を持ち続けていただくことができた点である。

第五章：まとめと今後の課題

今回のセミナーは、コロナ禍で渡日が遅れていた学生が渡日後すぐに箕面市の課題を解決するPBLに取り組めるように、学生に箕面市のイメージを喚起する目的で開催したものである。本稿では、セミナーの概要、その開催にあたり克服する必要があった問題、およびその開催が本プログラムにもたらした効果について論じた。

本セミナーは、NHKの番組「えぇトコ」の視聴、野菜の試食擬似体験、箕面市民とのディスカッションという３部構成であった。それは留学生が留学先・箕面市を自分の町として認識し地域連携を深めていくという「主体の新しさ」、新キャンパス開設、新駅設置による人口増加と発展が見込まれる地域の町づくりに関わるという「場の新しさ」、未渡日の留学生が世界の各地から箕面市のローカルな情報にアクセスできるように、地域と在外留学生を繋ぐという「方法の新しさ」を兼備したイベントであったが、開催に至るまでには種々の難しさがあった。

まず本セミナーでは、NHK、箕面船場まちづくり協議会、箕面市の農家の方にご協力いただいたが、大学を含めてそれぞれの立場が異なるため、打ち合わせを重ねる中で、趣旨理解や相互理解にもとづく信頼関係の構築を入念に行う必要があった。

次に開催当日には、限られた時間の中でオンライン上の学生にいかに情報と雰囲気（臨場感）を伝えるかということに注力する必要があった。オンラインの学生が中心となるようにオンラインの学生への呼びかけを多く入れたり、より理解を促すためにわかりやすい日本語や体の動きなどを交えたりしながら情報を伝えた。また、それらをセミナーの時間内におさめるべく緻密な事前準備が求められた。

以上のように開催されたセミナーでは、学生の高い満足度が得られ、大きく分けて４つの成果が得られた。学生たちは１つ目に、地域の人々の声を直接聞き、インターネットでは調べきれない箕面市に関する生の情報を獲得することができた。これは、未渡日であっても留学をしたからこそ実現可能なことであると考えられる。２つ目に、箕面市の様々な場所、箕面市で活動する市民団体、箕面市での生活に対する興味が高まった。これは、箕面という日本の一地域に着目するPBLに取り組む動機づけにつながったことが期待できる。３つ目に、箕面市の農業や町づくりの情報を得て、その特徴を知り、より具体的に箕面市についてのイメージができるようになった。本セミナーの最大の目的はこの点であり、これは渡日後すぐに箕面市に関するPBLに取り組まなければならない学生にとって問題意識を持つことの足掛かりになったと考え

られる。４つ目に、箕面市に住む人々と関係性を構築し、ラジオ体操などの地域社会の活動に参加することへの期待が高まった。地域の問題を解決するPBLは、地域の人々との協力や連携、および一市民として町づくりに携わろうとする学生の意識があってこそ、一層充実したものになっていくと言える。そのため、本セミナーにより、その下地が整えられたのではないかと考えられる。

本セミナーは、学生が渡日後に取り組んだPBLのテーマ、および学生と地域の方々との関係性に影響を与えたことが伺えた。発表会の発表タイトルでは、大学や留学生というキーワードにとどまらず、箕面市に関する幅広いテーマに取り組んでいるグループが複数見られた。また、本セミナーで取り上げた市民団体を後日訪問して箕面市の問題について話し合ったり、地域のイベントに参加して必要な情報を得たりする学生もいた。このように、学生が大学以外の場所に目を向けて箕面市の一員としてPBLに取り組めたことや、地域の方々にご協力いただき、本プログラムの取り組みに関心を寄せてもらえたことは非常に有意義であった。

箕面市に関するPBLを行うためには、箕面についての探究から深く学ぼうとする学生の姿勢が不可欠である。本セミナーを開催し、学生の箕面市に対するイメージを喚起したことにより、まだ箕面市で生活したことのない学生が問題意識を持つための足掛かりとすることができ、より積極的にPBLに臨もうとする意欲を掻き立てることができたのではないかと考える。また、本セミナーがメイプル・プログラムと地域が連携する足掛かりを作ったことにより、学生が渡日後にそれを土台として地域の人々と様々な形で交流できたことも意義深いと言える。

今回の産学民連携セミナーを踏まえて実施したPBLにおいて、学生たちは地域の課題を自分事と捉え、それを解決するために様々な提案を行った。他者に対して問題解決に向けた提案ができるということは、「他の文化の人たちや社会とつながることができる人になる」ことを目的としたメイプル・プログラムにおいて非常に重要な試みであると言える。今後もこのPBLの試みを継続していくとともに、将来は提案にとどまらず、学生が地域社会と連携して実際に課題解決をしていくことを目標としたい。そのためには、今後のPBLの事前セミナーとして、学生自身が課題解決の具体的な方法について他者と一緒に考えるようなパートを取り入れていくことが考えられる。また、事前セミナーで用いる映像やそこで取り上げる議題といったコンテンツの選定も重要であり、日本の地域社会の文化や人々の生活について学生が考えるよい契機となるようなものを継続的に追求していく必要があるだろう。短期交換留学プログラムとして、今後も産学民の連携を活かしたプログラム運営の可能性について検討し、学生自身が産学民の関わる地域社会において様々な実践を行うための環境を整えたい。

注

1）メイプル・プログラムのPBLには、2021年度秋～冬学期は７名の本センター教員と７名のティーチング・アシスタント（TA）およびティーチング・フェロー（TF）が、2022年度春～夏学期は７名の本センター教員と５名のTAおよびTFが授業運営に携わった。なお、大阪大学では、「修業年限を６年としている学科をおく学部の５年次以上の学生及び大学院生が補助的な教育支援活動に参画することを通じて、（ⅰ）教育指導能力のトレーニングを行い、（ⅱ）学部教育や大学院博士前期課程教育を充実させ、（ⅲ）修学のための経済的支援を行うこと」を目的とするTA・TF制度を設けている。TFは、TAの経験が18時間以上あり、かつ、TF講習会を受講した博士後期課程の学生が担当している（大阪大学「大阪大学TA/TF制度」および「TF別冊ハンドブック」による）。

2）残りの2割の学生についても、ほとんどの学生は遅くとも5月下旬までには対面授業を受け始めることができた。ただし、学期終了までに渡日が叶わなかった学生が2名おり、PBLに関する授業や、後に述べるPBL発表会なども、ビデオ会議システムを用いたオンライン形式（同時双方向型）で参加していたことを付言しておく。

3）PBL発表会当日のプログラムや、学生が発表した成果物等の詳細については、メイプル・プログラムのWebページを参照されたい。https://maple.cjlc.osaka-u.ac.jp/program/pbl-results.html

謝辞

本セミナーの開催、運営においては、多くの方々にご協力いただいた。とりわけ、NHKの中村拓司様、田中智子様、入江一郎様、そして箕面市やなもり農園の簗守壮太様、箕面船場まちづくり協議会の福留和彦様、飯田ひとみ様、株式会社ネッツ・コミュニケーションズの神谷英喜様、業務渡航センターの村山浩之様には、企画段階から当日まで、多くの時間と労力とご協力をいただいた。ここに改めて深謝する次第である。

参考文献

庵功雄・志賀玲子・志村ゆかり・宮部真由美・岡典栄（2020）『「やさしい日本語」表現辞典』丸善出版

小俣海斗・今井慎一（2021）「小学校におけるIoT 教材を活用したPBL型授業に関する探索的研究」『日本教育工学会論文誌』第44号第3号、日本教育工学会、pp.305-314

小針誠（2018）『アクティブラーニング　学校教育の理想と現実』講談社現代新書

立川真紀絵・小森万里・岩井茂樹（2022）「短期留学生プログラムにおける地域連携型PBLの実践と課題」『大阪大学日本語日本文化教育センター授業研究』第20号、大阪大学日本語日本文化教育センター、pp.1-11

中村早希（2022）「中学校英語科におけるサービス・ラーニング型PBLを取り入れた授業開発―SDGsの実現に貢献するグローカル人材の育成をめざして―」『鳴門教育大学国際教育協力研究』第15号、鳴門教育大学教員教育国際協力センター、pp.75-82

古田康生・原田理人（2022）「PBL型授業で地域レクリエーション事業にスタッフ参加した学生の学びの分析―2020年度のスタッフ参加学生の学びに焦点を当てて―」『岐阜協立大学論集』第56巻第1号、岐阜協立大学、pp.109-122

松岡里奈（2022）「日本文化授業の同期型遠隔配信によるチャット欄活用授業者以外の教員による＜やさしい日本語＞による授業解説の一提案―」筑波大学オンラインシンポジウム第5回「未来志向の日本語教育」（2022年8月4日）発表資料

渡部淳（2020）『アクティブ・ラーニングとは何か』岩波新書

参考URL

大阪大学「大阪大学のTA・TF制度」https://www.osaka-u.ac.jp/ja/education/academic_reform/ta_tf/tatf（2022年12月24日参照）

大阪大学「TF別冊ハンドブック」https://www.osaka-u.ac.jp/ja/education/academic_reform/ta_tf/files/hz8qj7/@@download/file（2022年12月24日参照）

（いわい　しげき　本センター教授）

（こもり　まり　本センター准教授）

（たちかわ　まきえ　本センター准教授）

（まつうら　こうすけ　本センター特任助教）